

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● インド・ラジャスタン州の旅

1989年1月、昭和天皇の死をインドの西部、パキスタンとの国境に近いラジャスタン州の砂漠の中の集落で知った。

砂漠の他に何もない道をバスにのって数時間走ると、幹線道路から100~200m位離れたところに、円形の土壁の上にトンガリ帽子の三角屋根が乗った民家が並ぶ家で構成される集落があった。面白い造形の家屋と集落の構成に興味を持ち、三々五々バスを降りて集落を見学に行くと、村の中心付近に小さな広場があり、20人近くの村人が集まり話をしていた。

「日本の建築家のツアーで、集落の家屋とその造形に興味があり見学したい」「写真を撮らせてほしい」と申し出たところ、私たちが日本の建築学会の集団であることを知った彼らは「日本国の天皇が今朝ほど亡くなられた」と知らせてくれた。そして口々にお悔みと哀悼の言葉を頂いた。

ツアーの添乗員も知らなかった天皇の死を、インドの辺境の地の村人から知られ、しかも丁寧な哀悼の辞までいただいたことに大変に驚き、ショックを受けた。

首都・ニューデリーから入り、西部のラジャスタン州のジャイプール、ジョドプール、ジャイサルメールなどをバスを借り切って回った。

インドでは水に気を付けるように言われていたが、初日に泊ったニューデリーのホテルで部屋に置かれていた水差しの水をウッカリ飲んでしまい、ツアーで最初に腹を壊し下痢をしてしまった。その後、旅の終わりまでに全員が腹を壊し、私が最初に回復した。

インドで特に印象に残った建物は、パキスタンの国境近くで宿泊したホテルである。

そのホテルの建物は土でできていた。

或いは日干し煉瓦の組積造で、仕上げは土であった。室内の床や壁、机や腰掛や窓際に添った長椅子などの造作材も土で仕上げられていた。きれいに仕上げられた土の上にクッションやマットレスやテーブルクロスが掛けられ、静かで落ち着いたインテリア空間ができている。



ピチョーラー湖中に建つタージ レイク パレス(ジャグニワース宮殿)

大地に吸い込まれるような、落ち着いた空間は初めて体験するものであった。ツアーの仲間たちとの食事や団欒の時間も、とても快適に過ごせた。旅の疲れもあってその夜は深い眠りが得られた。

湖に浮かぶマハラジャの真っ白な宮殿建築もタージマハル以上に印象に残る建築で、大理石で細工された柱・梁や透かし彫の装飾壁などが見事であった。

マハラジャがすばらしいロケーションと建築空間の中で生活していた感性の良さに感服した。

これはヨーロッパの王侯貴族とは異なる感性であり、厳島神社などを造った日本の感性に通じる。

インドの人々は日本人に親しみをもっている印象を受けた。ニューデリーからタージマハルを経由してラジャスタン州に入った私達は、観光客に土産物を売って生計を立てる少年、少女たちの土産物売り集団に付きまとわれ往生した。

彼らは日本人とわかると「オシン」「オシン」と言って寄ってきた。当時NHKの朝の連続テレビドラマがインドで放映されていたらしく、彼らはこのドラマを見ては、土産物売りの仕事に来ていたようであった。

このドラマは、東北の貧しい小作農家に生まれ、身売りされながらも、懸命に努力し生きていく「おしん」の一生を描いている。インドの土産物売りの少年少女たちはこの生き方に共感し、日本人の私達に親近感を訴えているように思えた。

みき・てつ

専共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかつた時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。